

師とは三世に契り

香川大学医学部 名誉教授 愛媛労災病院院長

西岡 幹夫



私どもの年齢となると、恩師、先輩、さらには友と幽冥界を異にすることが多くなるのはいたしかたがない。千葉大学名誉教授、奥田邦雄先生が昨年2月2日、忽然とご逝去されたのは、40年以上の長きに亘り先生の御指導を受けた身にとっては、痛恨の極みであった。先生の黄泉への旅立ちが恙なくあれとお祈りしてから、早や一年が経つが、何かにつけ思ひだす。

奥田邦雄先生は私の学生時代からの恩師である。恩師とは、もしその人に会えなかったら道を踏みはずすか、また、もっと無駄な回り道をしていたであろうその人のことだとすれば、奥田先生はまさにかげがえのない私の恩師である。

初めて先生にお目にかかったのは山口県立医科大学の古い階段教室、先生の熱のこもった臨床講義で、今もその内容を鮮明に記憶している。当時しばしば見られたペラグラについて、ニコチン酸欠乏症との関連性において、理論整然と病態生理的なアプローチをされ、深い感銘を受けた。若い先生は学外をハイカラな赤いシャツを着て闊歩され、また、バレーボール部、さらには弦楽部の練習にも参加され、“キザッポイところが見られたが、文武両面に於ける兄貴分”だった。

先生のご薫陶を得たのは私の大学院時代、先生が再度のアメリカ留学から、丁度帰国された頃である。“胆汁の逆流機序”という研究テーマを頂きながら、あまりにも厳しい先生の御指導に、また、私が自分自身のアイデアで考案した実験装置を無視して、壊されて、私はただ反発したものだ。この借りをいつか返そうと思いながら、“ミイラ取りがミイラになる”ように、いつの間に肝臓の研究から足が洗えなくなった。今なお、一度も“コテ”すら取れず、御

恩に報いられぬ不肖の弟子といえよう。なお、この実験はほぼ1年で終了し、日本語と英文でまとめ上げ、早々と学位を頂戴した。

当時、先生の助教授室からは、何時もタイプライターの音が、けたたましく、せっかちに、断続的に聞える。覗くと、

論文のabstractをカードに打たれている様子。早速、手仕事、タイプライターなら負けまいと、私も購入し、猛烈に練習する。お蔭様で、タイプが上達し、嫌いな英語にも次第になじみ、医学の新知識も得られ、一挙両得であった。また、当時、大学にすら無い電動のタイプライター（ヘルメス製）を破格の値段で購入し、先生が吃驚されたのを覚えている。後日談ではあるが、大学院卒業後、アルファフェトプロテインの研究が進み、その成果がCancer ResearchやClinica Chimica Actaなど英文誌にあいついで掲載された。いち早く、先生（当時は久留米大）はこれに気づかれ、本格的な研究が山口大学で始まったことを喜ばれ、お手紙で直接激励を受けた。師から褒められるとうれしい。やる気が沸いてきたことは言うまでもない。

話は、また大学院時代に戻るが、先生のご自宅に実験助手と共に洋風のディナーに時に招待される。40年も前のこと、チーズはまだ貴重品だったし、それに人参や胡瓜、さらには大根まで立て切りにし、それぞれグラスに立ててある。塩をつけて食べると美味しかった。先生のアメリカ生活にも花が咲き、われわれもアメリカ留学を夢見る。ウイスキーはサントリー角びんの時代、先生はバーボン、マティーニを気前良く振舞われ、われわれ子分は奥田親分への忠誠を誓うようになる。

奥田先生に直接御指導を受けた期間はわずか1年

半である。しかしながら、その後、今日まで大変密度の濃いお付き合いを願うことになる。恩師とは何か。“師とは三世の契り（童子教）”、師とは現世のみでなく、前世、来世においても深い因縁で結ばれている、と室町時代に考えられたのも何となく解るような気がする。

奥田先生は山口県立医科大学では、講師、助教授、さらに、久留米大学、千葉大学においては教授として、加えて、ご退官後も、多くの人を知るように、数々の国際的な業績を残し、また 超人的な行動力で後進の指導に当られた。そして、多数の優秀な臨床家、研究者、教授を育成されたことは、今さら言うまでもなからう。

師とは何か。先生の座右の銘は“水は低きにつく”で、“水は低いほうに流れてしまいますから、逆に押し上げるぐらいの努力をしないと人間は進歩しません”と、インタビューで言われている*。先生は日々進歩された。従って、国の内外から多くの共鳴者が次々集まり、弟子は先生から良い所を引き出され、さらに、成長した。“良き弟子とは先生の良き鏡”となると、私には、道なお遠し、と言えよう。

* 西岡幹夫, 奥田先生に聞く, MEDIC, Vol.27: 11-17, 1992, 医心人心 (続), メディカルジャーナル社, 1995年, 562-567頁.

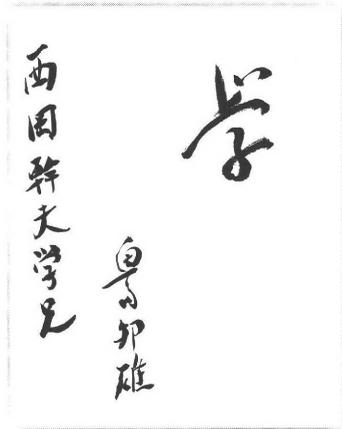


写真1 奥田邦雄先生より頂いた色紙



写真2 高松市に奥田先生をお迎えして (1988年)